

第8回世界遺産学習全国サミット in おおだ (2017. 11. 25 大田市市民会館) 参加概要報告

大和郡山市立郡山西小学校 教諭 島俊彦

島根県大田市で開催された、「第8回世界遺産学習全国サミット in おおだ」に参加した。全国各地の特色ある実践が報告されたり、児童・生徒による実践報告が行われたりして、世界遺産学習やESDについて学ぶ絶好の機会となった。

(1) 分科会

大田市立大田小学校「守り伝えよう！『石見銀山』～先人の知恵や足跡は今もこれからも～」

大田市が取り組む石見銀山学習の一例を示してもらった。石見銀山がもつ「自然と暮らしの共生」という世界遺産としての普遍的価値や魅力に、児童が見学や体験を重ねながら迫っていく学習展開が面白かった。また、石見銀山の学習だけに留まらず、世界の危機遺産と石見銀山を比較することで、児童が課題意識や切実感を持ち、石見銀山を次代に残すために自分達にできることを考えることで、「Think Globally, Act Locally」を具現化していた。

廿日市市立宮島小学校・宮島中学校「宮島を誇りに思い 宮島の未来を創る 児童生徒の育成」

地域が有する豊かな教育力を十二分に活用し、社会に開かれた教育課程の実現を図っていることが印象的だった。また、小規模小中一貫校の特色を生かし、9年間を見通したカリキュラムマネジメントを実践していた。児童・生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした、系統的なカリキュラムから学ぶことは多かった。

(2) 児童・生徒による実践報告

島根県大田市立大森小学校「全校児童劇」

児童が学んだことを、十分に表現しており、引き込まれた。児童十数名、全校児童で協力して一つのことに取り組んでいる様子が素敵だった。学校を挙げて世界遺産学習に取り組む好例だと感じた。

福岡県大牟田市立みなと小学校・天領小学校「壮大なる三池港プロジェクトから百年そして、次の百年へ」

郷土の発展に尽くした、團琢磨の営みに寄り添いながら、三池港や日本の発展を学ぶ学習展開が面白かった。百年先の三池や日本の姿を考えた團琢磨の思いを受け継ぎ、これから百年後の三池や日本の姿を児童が考えていく。世代間の公正を大切にしたい授業実践であった。

奈良県奈良市立飛鳥小学校「きょう土の発てんにつくした人～川路聖謨～」

「百年後の奈良はこうなってほしい」という願いをかなえるため、自分達にできることを児童が主体的に考えていく。川路聖謨の願いや思いを受け継ぎ、未来の奈良を考えていく学習は、児童にとって学ぶ価値の高い教材である。

(3) 記念講演

横浜市立永田台小学校 校長 住田昌治氏「持続可能な社会の創り手を育むために～新たな時代を創る ESD～」

次期学習指導要領前文には、「持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と記されている。もはやESDは、ユネスコスクールだけでなく、日本中の学校が取り組むべきことである。

「ESDに明確な答えはない。大人と子供と一緒に思考し、対話しながら問題解決や探究をする」という言葉が印象深かった。大人も子供も、学校も社会も、学習観の転換を図る過渡期にある。ESDに取り組むことによって旧来の教育の在り方自体を変えていく必要があると強く感じた。

(4) 大会参加を通じての学び

、世界遺産学習やESDにおける授業デザインについて、「学びの深まり」「発信」「地域がもつ教育力」という3つの視点から学びを報告する。

1点目は「学びの深まり」である。石見銀山学習に取り組む小学校の報告を聞いた。その小学校は、銀山から距離が遠く、必ずしも銀山が児童にとって身近な教材になり得ないという課題を抱えていた。そこで、銀山を身近に感じさせるための手立てとして、石見銀山に関する情報を児童に調べさせたり、まとめさせたりして、知識を蓄積させる工夫をしていた。報告者は「知識を持てば持つほど児童の学習意欲が高まる」と主張していた。しかし、その主張には疑問が残った。児童が獲得した知識が、石見銀山に関する断片的なものに終始しているように感じられたからである。本来、学習を通じて獲得させたいのは、銀山と自分の生活あるいは自分たちの住む地域（校区）などを関連づけた、つながりのある知識である。そのような知識は、児童が抱いた問いを、自ら追求・解決していく探求的な学びのプロセスの中で獲得される。その意味で、児童に問いをどのように持たせるか。問いを中心に授業をデザインしていくことで、学びが深まっていくのではないかと考えた。

2点目は「発信」である。ESDは、価値観や行動、ライフスタイルの変容を求める学びである。学習や経験を、まとめて終わりではない。学んだことをどのように生かせるか、何が出来るようになるのかを見据え、児童の実践力を高めていく必要がある。全体会での児童・生徒による実践発表は素晴らしかった。学んだことを、多くの聴衆の前で堂々と発信していた。自分たちの学びをどのように社会や世界に向けて発信していくのか。児童一人一人が自分達に出来ることを考え、その役割を自覚していくことは、社会参画力の素地を養う上でも重要である。学習の出口（発信）を意識して、授業をデザインすることの大切さを学んだ。

3点目は「地域の教育力」である。世界遺産学習と聞くと、世界遺産を有する地域に特化した学習のように感じるが、そうではない。本校のように世界遺産が近くに無くとも、地域は必ず児童の学びに資する人的・物的リソースを有している。教員が地域と正対し、地域教材を開発していくことで、児童の学びに向かう姿勢が変わり、深まりが出てくる。このことは、社会に開かれた教育課程の実現に向けても、今後より一層求められることである。学びのフィールドを教室から地域へと広げ、地域の教育力をフル活用した授業をデザインすることが大切であると考えた。

本サミットには、学生時代を含め今までにも何度か参加している。学生時代と比べ、今の自分は、自身の授業や実践に置き換えたり引き寄せたりしながら、実践報告や講演を聴けるようになってきた。様々な話を聞いたことで、今後の授業や実践を作っていくアイデアを得ることができた。

